

# 総説論文というもの

公立大学法人 福島県立医科大学 腫瘍内科学講座 佐治 重衡



12~13年ほど前のことであろうか。4年ほど基礎研究者として過ごし、留学から帰国し、バリバリの（本人談）physician scientistとして意気盛んであった自分にとって、総説論文 review article の価値というのはとても低いものと思っていた。研究を通じて何か新しいものを作り出す研究論文 original article と異なり（実際には、神様が作った自然界のしくみを、ちょっと覗かせていただいているだけなのだが）、多くの優れた研究者が必死に作ったデータを勝手にこねくり回して、もっともらしい理屈を書くのは、「他人のふんどしで相撲をとる」（失礼）だと思っていた。あるとき、review article を比較的たくさん書いていた上司に「review 論文ばかり書いてもしかたないですよねえ」と、何かの拍子でぼろっと言ってしまった（大変失礼）。その上司は、ふーん、まだわかってないねえという表情で「そうでもないんだよ」と優しく答えた。

医師としての仕事はもちろん重要だが、大学の研究者や教員という職種にとって学術業績というのはとても重要である。例えば研究会などで依頼される講演活動というのは、学術業績としてはほぼゼロ評価であり、どちらかといえば演者の知識や経験の切り売りのような要素が大きいとは思ふ。もちろん、若いころにご依頼を受ければ光栄であり、その準備のために費やす時間やその作業、また場数をこなしていくことは本人のスキルを上げるなど、いろんな形で良い影響もある。また、普段の大きな学術集会と異なり、比較的身近な規模でいろんな地域の先生の状況をお聞きしたり、ひ

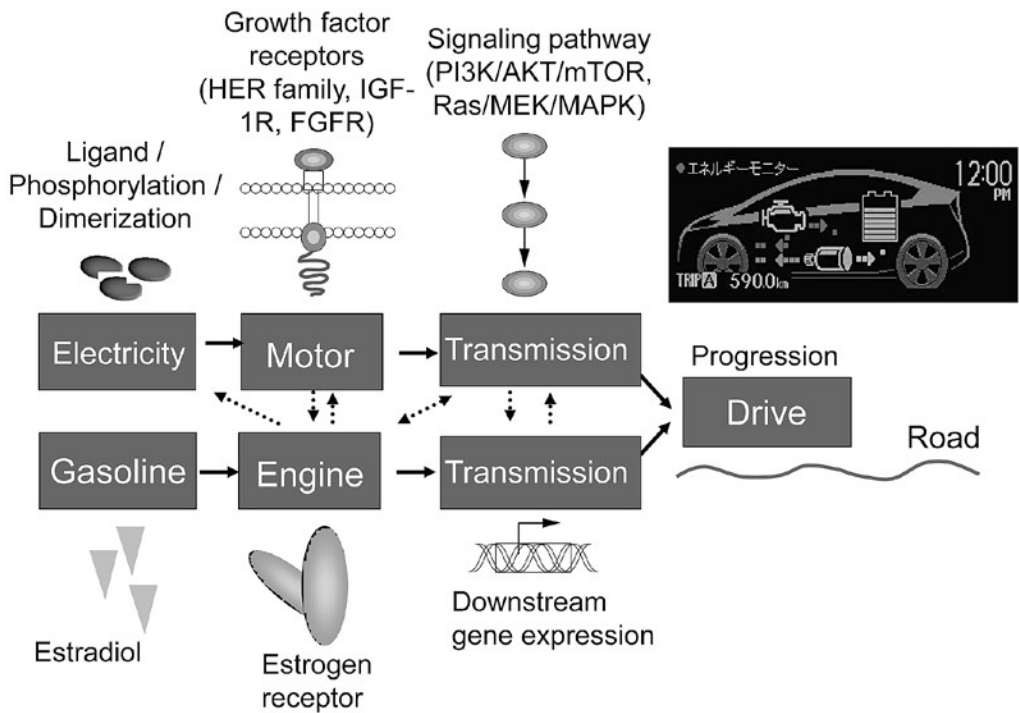
とつの具体的な話題で議論をしたりすることはとても楽しい。とはいえ、これらの楽しい時間は、流れてゆくものであり、ほとんどの場合は新しい何かを生み出すだけの力はない。

一方、同じテーマで講演を重ねていくと、聴衆の先生からの意見によって少しずつブラッシュアップしていくものがある。自分にとってのそんなもののひとつが、乳癌のバイオロジーを車のハイブリッドカーにたとえた図であった（図1）。偶然、プリウスに乗せてもらったときに目の前のモニターを見ていて、エンジンだけになったり、モーターだけになったり、エンジンが発電したり、とパワートレインが刻々と変化するのがおもしろいなと思っていたのだが、何かに似てるかと考えていて、はたと乳癌に行き着いた。エストロゲンレセプターがエンジン、エストロゲンがガソリン、モーターが HER2 と考えると、自分がおこなった細胞実験の結果を臨床の先生に説明しやすい。ということで、機会あるごとに講演でこれを使用し、少しずつ改変していった。2年ほど使ってきたときに、もしかするとこれは論文として残しておいたほうがいいのではないかと考えるようになった。とはいえ、こんな形式の original article はないので、どうしようかと思っていたところ、メンターの1人が「雑誌の編集部と交渉してみたら？」と。交渉できるものなのか、半信半疑でどうせなら Nature review clinical oncology へ素案を送ったところ、おもしろそうだから投稿してみてくださいとなり、あとは何回か編集部と交渉をしつつ original figure 付きの

letterとして掲載となった。この不思議な letter は新規分子標的治療薬である mTOR 阻害薬とホルモン療法の併用療法を検証した第 III 相試験 BOLERO2 の背景メカニズムを理解するために有用であるということによってアクセプトされている。

そう、総説論文というのは、複雑なものから本質を抜き出して、理解しやすい形で提示する、

またその理解から、次に何を生み出すべきかを考える場を与えるものなのである。そのような総説論文は、いろいろな人との議論を経て、時間をかけて新しく生み出されてくるものなのである。15 年を経て、やっとこれが理解できた自分は、まだまだな研究者なのである。



Saji S, IJCO, 2015.  
Saji S, Nat Rev Clin Oncol 2012.

図1 乳癌のバイオロジーとハイブリッドカーの類似性